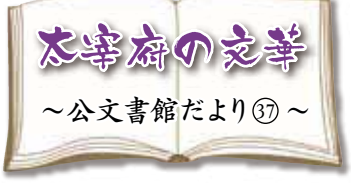
# 五卿と関わった福岡藩医

慶応元（1865）年、8月18日の政変により京都を追われ、長州藩へ逃れていた尊攘派五人の公家「五卿」が太宰府に転座しました。五卿は慶応3年に帰京しますが、滞在中は太宰府周辺の文化人らと交流していたことが記録に残されています。中には医師の名前も見え、通古賀村の陶山一貫（すやまいっかん）や大石村の岡部忠徳（おかべただのり）といった太宰府の開業医宅に三条実美（さねとみ）が訪問していたことは『太宰府市史』などでも紹介されています。

福岡城下新大工町居住の塚本家は、南蛮流外科を相伝する外科医で初代道庵の時代に召し抱えられた福岡藩医の家です。現在、塚本家に伝わる資料は福岡市博物館に寄贈されていますが、その中に五卿との関わりを示す資料があります。この時期に当主をつとめていたのは8代目の塚本道甫（どうほ）といい、大坂で蘭方医術を身につけ万延元（1860）年に家督をつぎました。資料は福岡藩側から道甫へ宛てた書状2通と達書控え1通で、五卿が京都へ戻る時の付添を命じるものです。五卿の官位回復と帰京は、討幕派の鹿児島藩が朝廷内での主導権を握るために画策したもので、慶応3年12月14日に鹿児島藩から三条実美らに伝えられました。道甫への書状は翌日15日付で、「五卿衆の付添として京都へ行くことはすでに達していたが、明後17日に太宰府を発つのでその心得でいるように。同日は箱崎で待ち請けて乗船すること」とあります。当時の船旅は博多、大坂間で4、5日要し、大坂から京都までの陸路を入れると1週間ほどかかります。五卿を預かっていた福岡藩としては、要人を送り届けるため医師を随行させたものと考えられ、その役目を塚本家に任せたのでしょう。なぜ道甫が選ばれたのかについては資料がないため分かりませんが、道甫の父である7代目道禎（どうてい）は幕府巡見使が福岡藩内を通行する際に付添を命じられているので藩側の信頼があったのかもしれません。

さて、五卿の太宰府出発は強風のため19日に延期となり、道甫は21日に五卿と出会（しゅつかい）し乗船しました。塚本道甫という藩医は、文化的交流ではなく藩命により専ら医師として五卿と関わった人物として興味深いです。維新後、道甫は福岡県庁から洋医学専任として医学校出仕を命じられ、明治6（1873）年には二等軍医副に任じられるなど明治期にも活躍しました。

太宰府市公文書館　太田黒真美